

二〇一八（平成三〇）年度

昭和文学会 春季大会

会場 東京女子大学 一三三号館・九号館

〒一六七―八五八五 東京都杉並区善福寺二―六―一

（連絡先 Ⅸ：〇三・五三八二・六三〇六）

日時 六月一六日（土） 一二時一〇分より

昭和文学会・台湾日本語文学会 姉妹学会締結記念 国際シンポジウム

東アジアの日本文学研究の可能性と課題

開会の辞

東京女子大学現代教養学部長 原田 範行

【基調講演】（一二時二〇分～一三時一〇分） 一三三号館二三二〇一教室

台湾日本語文学会と、台湾の日本文学研究

台湾日本語文学会理事長・輔仁大学教授 頼 振南

【研究発表】（一三時二〇分～一六時一〇分）

〈第一会場〉イメージの台湾・南方 九号館九一〇一教室

・昭和初年の『少女の友』にみる台湾イメージ——「台湾新八景」との関連を中心に

東洋大学・日本女子大学・早稲田大学非常勤講師 宮内 淳子

・戦後日本の「大衆文芸」における「台湾」 淡江大学副教授 李 文茹

——五〇年代から七〇年代にかけての日影丈吉の作品を中心に

・南方の女の記号——八木義徳「女」をめぐる 東呉大学副教授 阮 文雅

・植民地末期、朝鮮半島における日本語文学の再編と南方表象

高麗大学教授 鄭 炳浩

〈第二会場〉 移動とネットワーク 九号館九一〇四教室

・田村俊子『女声』の背景

日本大学教授 山崎眞紀子

——一九二〇年代と一九四〇年代の日中女性関係の温度差を軸にして

・汪兆銘政権勢力下の日本語文学——上海・南京・武漢を中心に

奈良大学教授 木田 隆文

・ディアスポラを生きる——武田泰淳『風媒花』の意味

復旦大学教授 李 征

・「満洲」とかかわる台湾人——謝介石と鍾理和から見る

東呉大学教授 林 雪星

〈第三会場〉 戦後文学を捉え直す 九号館九二〇一教室

・〈物質〉^{マテリアル}としての日本語——台湾の日本語作家・黄靈芝の言語観

広島大学准教授 下岡 友加

・「もう一つの戦後文学」としての「ハードボイルド・ミステリ」

——船戸与一が描く「植民帝国日本」の「記憶」 輔仁大学副教授 坂元さおり

・現代韓国文学の〈周縁〉から考える〈自己語り〉 大正大学准教授 梅澤亜由美

・左へ？右へ？——大江健三郎「純粋天皇」作品群試論 政治大学副教授 呉 佩珍

【ディスカッション】（二六時二〇分～一七時二〇分）二三号館二三一〇一教室

東アジアの日本文学研究の可能性と課題

パネリスト 呉 佩珍

李 征

鄭 炳浩

閉会の辞

代表幹事 一柳 廣孝

※終了後、総会を予定しております。

※懇親会は、オールドクロウ（武蔵野市吉祥寺本町一―八―三 地下一階）にて予定しております。
予約は不要、当日受付にてお申し込み下さい。

【企画趣旨】

二〇一八年度春季大会は、昭和文学会と台湾日本語文学会が姉妹学会提携を結んだことを記念し、「日本（語）文学研究」分野における国際的な学術交流の可能性と課題について、東アジア各地域での研究状況をふまえながら共同討議する機会としたい。

台湾の研究状況に関して言えば、旧台湾総督府図書館蔵書の影印を公開した「日治時期圖書全文影像系統」「日治時期期刊全文影像系統」、旧総督府行政文書の公開画像データベース（數位典藏整合查詢系統）、オンライン版『臺灣日日新報』（契約データベース）、多数の古地図を地域ごとに現代の電子地図と照合できる「臺灣百年歴史地図」（公開）など、日本統治時代の資料へのアクセスが容易になっており、これら先進的なデジタル・データベースを用いた文学・歴史分野の研究が急速に活性化している。

一方、日本統治時代の日本語を主とする文学に関心を注いで来た九〇年代以降の「台湾文学研究」は、今や戦後の中国語を中心とする創作の研究が圧倒的に主流化しており、「日本（語）文学研究」の台湾における学問的な配置にも近年では大きな変化が生じつつある。

多様なエスニティーと外来政権による支配の歴史から、言語とアイデンティティーとのせめぎ合いが極めて日常的なレベルで問題化されやすいのが台湾社会の特質であり、このテーマに日本語創作を通じて取り組む東山彰良・温又柔の活動が注目されている。また、一九三〇年代台南の日本語による文学運動をモダニズムに絡めて描いた黄亞歴監督の『日曜日式散歩者』、魏徳聖監督の『海角七號』『KANO』、黄銘正監督の『灣生回家』など、厳然たる政治的不均衡の構造はありながら、植民統治期に民間人が培った「絆」を好意的に扱う映画の大ヒットが続いている。その背景として指摘される台湾若年層の「懐日ブーム」の広がりや、どう評価するかが、昨今様々な議論を呼んでいる。

「日本（語）文学研究」のインフラや、言語とアイデンティティーをめぐる問題、文学や映像による日本表象・アジア表象の問題について、台湾の現状紹介を軸にしつつもそれをより広く東アジアの状況の中で捉えていくために、本大会では各地域から発表者を迎え、それぞれの分野で深化しつつある専門研究の成果を自由に示してもらいながら、今後の研究上の課題について、参加者どうしの間に、積極的な意見交換が行われることを期待したい。

【講演者・パネリスト紹介】

頼 振南（らい・しんなん）

台湾日本語文学会理事長。輔仁大学外国語学部外国語学院長・日本語文学科教授。専門は平安朝初期作り物語の研究と国際医療翻訳・通訳。著書に『平安朝初期物語の研究』（豪峰出版社、一九九五年）、『日本文学の種々相』（尚昂文化事業、二〇〇四年）、『竹取物語』訳註（聯経出版、二〇〇九年）、『落窪物語』訳註（同、二〇一六年）など。

呉 佩珍（い・はいちん）

政治大学台湾文学研究所副教授。専門は日本近代文学、日本植民期日台比較文学、比較文化。著書に『真杉静枝與殖民地台湾』（聯経出版、二〇一三年）、編著に『中心到邊陲的重軌與分軌：日本帝國與台灣文學・文化研究』（台湾大学出版センター、二〇一二～一三年）、『台日韓女性文學：一場創作與發展的旅程』（秀威資訊、二〇一六年）など。

李 征（り・せい）

復旦大学日語語言文学系教授。専門は日本近代文学、比較文学。著書に『表象としての上海：日本と中国の新感覚派文学運動に関する比較文学的研究』（東洋書林、二〇〇一年）、『都市空間的叙事形态：日本近代小説文体研究』（復旦大学出版社、二〇一二年）、編著に『上海一〇〇年——日中文化交流の場所』（勉誠出版、二〇一三年）など。

鄭 炳浩（じょん・びょんほ）

高麗大学日語日文学科教授。国際日本文化研究センター外国人研究員。専門は朝鮮半島の日本語文学、災害文学。共著に『外地』日本語文学への射程』（双文社出版、二〇一四年）、編著に『東アジアにおける日本語雑誌の流通と植民地文学』（図書出版亦楽、二〇一四年）、『東日本大震災と日本』（関西大学出版会、二〇一三年）など。

※基調講演と研究発表の要旨はホームページに掲載し、当日来場の皆様に配布いたします。

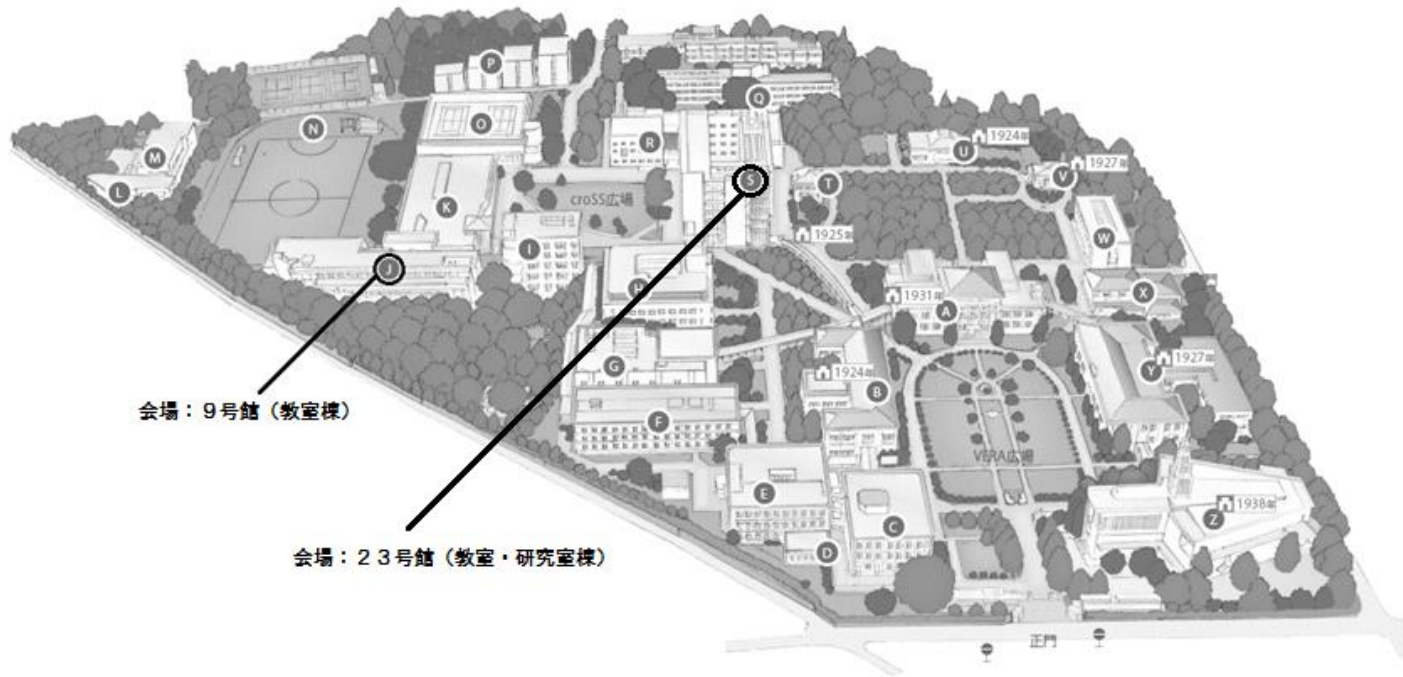
東京女子大学 アクセスマップ

バス JR・京王 吉祥寺駅北口(三番のりば)より関東バス(西一〇)西荻窪駅行 「東京女子大前」下車
 JR 西荻窪駅北口(一番のりば)より関東バス(西一〇)吉祥寺駅行 「東京女子大前」下車
 徒歩 JR 西荻窪駅 北口より徒歩二二分

大学周辺図



大学構内図



※会場は**二三号館・九号館**です。